

2021年10月3日（日）主日朝礼拝説教

『悪はどこから来る』井上隆晶牧師  
エフェソ書2章1～6節、マルコ7章20～30節

### ①【悪はどこから来る】

今日は悪霊につかれた幼い娘の救いのためにイエス様を求めた婦人のお話をします。その前に、イエス様はユダヤ教の学者と議論した話が出てきます。彼らはイエス様の弟子が手を洗わないで食事をするのを見て非難しました。これは衛生上の理由ではありません。ユダヤ教では外国人は汚れていて、自分たちは聖く、外国人が触ったものを触ると汚れが移り、その手で食事をするすると汚れが自分の中に入って来ると思っていました。だから食事の前に手を洗ったのです。それに対してイエス様は、外から人の体に入って来るものは人を汚すことはない。腹の中で浄化されて清められ便となって外に出されるのだ。むしろ「人から出てくるものこそ人を汚す。中から、つまり人間の心から、悪い思いが出てくるからである。」（マルコ7：20）と言われました。悪い思いとは、自己中心、傲慢、貪欲、悪意、ねたみ、悪口、怒り、裁く心などです。悪というのは人の外にあるのではなく、人の中にあるというのです。悪は存在ではなく状態です。神がお創りになったものはすべて善いものです。自然界のものも、すべての人間も善いものです。これがキリスト教の基本的な考え方です。しかし人間の罪によって善いものが悪い目的に利用されてしまうのです。例えば科学の発達は善いものですが、それで原爆やミサイルなどの兵器を作り、遺伝子操作をして男女を産み分け、自分の好みに合う能力の優れた子供を作るというのは悪魔の業です。罪（悪霊）は人間の意志と知性に働いて支配し、身体を悪を犯す道具とするのです。

●エディ・ジェイクという人は1920年にドイツのライプツィヒに生まれたユダヤ人で、今年101歳を迎えます。彼はアウシュヴィッツ収容所に送られながらも助かり『世界でいちばん幸せな男』という本を書きました。この本の中で彼はこんなことを書いています。「モラル（道徳や倫理）を失えば、自分を失う。これはナチスを見てすぐに私が学んだことだ。ナチス政権下で、ドイツ人がすぐに悪人になったわけではなかったが、簡単に操られるようになった。心の弱い人たちはドイツ人であろうとユダヤ人であろうとゆっくりとだが確実にモラルをなくし、ひいては人間性までなくした。そして、他人を拷問しても、家に帰れば妻や子供たちと向き合える人間になった。私はよく、彼らが子供を母親から引き離し、その子供の頭を壁に叩きつけるのを目撃した。そんなことをした後で、食事をして眠れたのだろうか。私にはそれが理解できない。」「自分に誠実でいよう、モラルを失わないようにしよう。…私は一度も文明人である意味を見失ったことはない。罪人になってまで生き残ってどうする。私は被収容者を傷つけることはなかったし、人のパンを盗むこともなかった。仲間を助けるために出来る限りのことをした。確かに食べ物には乏しかった。しかしモラルを取りもどす薬はない。もしモラ

ルを失ったら、おしまいだ。」

では、正義や道徳心や倫理観を強くするにはどうしたら良いのでしょうか。

## ②【どうすれば悪い心なくなるのか】

悪い心は私たちの心の中から出てくるのですが、たぶん死ぬまで無くなることはないでしょう。イエス様は毒麦と良い麦の譬えをされましたが、これは私たちの心の中の悪い心と善い心を象徴しています。そして互いの根が絡まっているから毒麦だけを抜くことはできないと言われました。つまり体が枯れるまで、つまり死ぬまで悪い心と善い心は私たちの中に共存することになるでしょう。でも悪は必ず最後は抜かれて残ることはないでしょう。悪は神が創られたものではないからです。大事なのは、善を育てることです。正義や道徳心や倫理観が強い人というのは、親や先生からそのように教わり、愛されたからだと思います。人は自分の持っているものだけを他者に与えることができ、自分がされたように他者にもするものです。愛された人は他者を愛します。善と愛がその人の中にあるからです。

●私の田舎に行くと、湧水の出ている沢がいくつもあります。湧水は止まることなく常に清い水を湧き出しているのです、どんなに周りに泥土があっても何でもないうものになっています。それと同じで善いものをどんどん自分の心の中に入れるのです。そうすれば知らない間に、心は善いものでいっぱいになるでしょう。

ところで以前私は「神がお創りになったものと、神がなされたことは信じなさい。人間から出たものは信じてはいけません。」と語ったことを覚えておられますか。なぜなら「善い方はお一人である。」(マタイ 19:17)と主が言われたからです。善い方は「父と子と聖霊の神様」だけです。そしてこの方がなされたことは何もかもすばらしいのです。この世で不幸にも善い親や善い先生に恵まれなかった人もいます。でも神はすべての人のすぐそばにおられます。誰でも、それらの善い方を求めることは出来ますし、その善いお方は喜んでその人の中に入って下さいます。

シリア・フェニキアの女性はイエス様を必死に求めました。彼女は唯一の「善い方」を求めたのです。それゆえ、彼女は清められました。彼女のイエス様を求める求め方は実に貪欲です。「娘から悪霊を追い出してください」と頼んでも「まず、神の子供たちであるユダヤ人を救わなければならない。子犬である外国人にあげるものはない。」と断られます。それでも「食卓の下の子犬も、子供のパン屑はいただきます。」(7:28)と言って、犬と言われても決して諦めませんでした。私たちはすぐに求めることをやめ、諦めてしまいます。そしてキリスト以外のものに向かって生き始めます。16世紀のスペインの十字架の聖ヨハネという聖人はこう言いました。「神に期待する人は、その期待する分だけ神から受ける。」彼女はキリストの手から落ちる「パン屑でけっこうです。それを下さい」といいました。それだけで私の娘は癒されると信じたのです。一方ユダヤ人である弟子たちは、

屑ではなくパン本体であるイエス様のすぐそばにおり、耳にタコができるほど教えを聞き、奇跡を何度も見、その手から聖なるパンをいただきながら、イエス様という尊いパンを手の隙間からこぼしたのです。恵みがそばにあったのにそれを無駄にしたユダヤ人と、恵みから遠かったのに、恵みの屑だけでも十分だと信じた外国人と、どちらが恵みを大切にしたのでしょうか。どちらが本当の神の子なのでしょう。先の者が後になり、後の者が先になるはこうして成就するのです。恵みがあれば人は救われるのではありません。恵みを恵みだと本当に信じる人だけが恵みを受け取ることが出来るのです。罪とは悪いことをするというよりも、唯一の善い方であるキリストの価値が見えずに、それ以外の物を必死になって求めるということなのではないのでしょうか。自分の生涯を顧みても、本当にどうでもよいものに時間をかけ、命を使い、追い求めていたと思います。あなたはキリストの価値が本当に分かっていますか？

### ③【他人や周りが問題なのではなく、いつも自分が問題であること】

イエス様はこの女性に「それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てしまった。」(29節)といわれました。彼女が家に帰ると娘は床の上に寝ており悪霊は出てしまっていました。悪霊につかれていたのは彼女の幼い娘なのに、母親が変わることで、娘から悪霊が出て行きました。問題は幼い娘にあるのではなく、実はその母親にあったということなのではないのでしょうか。私は幼い娘になぜ悪霊がついたのか考えました。先ほど、イエス様は「人の心の中から出てくるものが人を汚す」と言われました。幼い娘から悪が出たとは考えられないのです。とするなら母親の影響と考えるべきなのではないのでしょうか。娘が何か異常な行動、問題行動を起こした時、母親はこの子に悪霊がついた、悪霊が娘を汚したと思い込んだようですが、実は母親自身の心の中から出てくる悪い思いが娘を汚していた、ということなのではないのでしょうか。その母親自身がイエス様によって変えられ、清められたので、娘も清くなったと読んで方が良いのではないのでしょうか。

●私の経験では、このような出来事はよくあることなのです。あるご夫婦にアルコール依存の息子さんがいました。お酒がやめられなくて問題ばかり起こし、毎日が地獄のようでした。しかし両親は精神病院に行き、依存症について学ぶようになり、同じ苦しみをもつ親たちの集会に行くうちに「自分たちが悪かったのだ」と思うようになりました。すると息子さんのアルコール依存も奇跡的に回復したのです。母親は教会に来るようになり「息子やその嫁に対して犯した罪を赦してほしい」と洗礼を受けクリスチャンになりました。

問題は他人にあるのでも、社会にあるのでもありません。あなたにあるのです。まず自分が変わる、イエス様という恵みと愛と平和に満たされる、それが大切だと思います。その時始めて、私たちは他者を愛せる者になれるのだと思います。イエス様という唯一の善い方を絶えず求め続ける者となりましょう。